

保育者をめざす学生のもつ動植物に対する イメージに関する研究Ⅱ

A Study on the Various Merits and Demerits in Caring After Plants and Animals at Nursery School or Kindergerten. Ⅱ

高橋弥生 おかもとみわこ
(Yayoi TAKAHASHI Miwako OKAMOTO)

I. はじめに

現代の学生は、生活感が薄く、あまり深く物事を追求したり、自ら工夫したりすることが非常に少ないように感じる。面倒くさいことを大変嫌うのである。そのため、飼育・栽培当番の活動も、動植物が死なない程度に形だけ行っているような印象を受ける学生が少なくない。

昨年我々は、子ども学科の短大生を対象に動植物のイラストを描かせてみた。すると、飼育・栽培の経験を積んでいるはずの学生でも、イラストは漫画的だったり、特徴をまったく捉えていなかったりするものも多かったのである。子ども学科で行っている飼育・栽培実習の効果が十分には反映されていない結果となった。

今回は子ども学科での飼育・栽培の経験はほとんどない学部1年生を対象に、昨年と同様にイラストを描く調査を行い、昨年の調査結果と比較しながらその内容を考察していこうと考えている。また、大学に入学するまでの飼育・栽培経験や遊びの経験が何らかの影響を与えるのかどうかについても検証してみたいと思う。

II. 研究の概要

1. 目的

保育者を目指す学生の、飼育・栽培に関する体験、および子どものころの遊び体験を調査する。また、その体験が学生の描く動植物のイラストに影響を与えているかどうかを明らかにする。

2. 研究方法

○子ども学科1年生を対象にアンケート調査を行う。

アンケートの内容は、幼稚園・保育所、小学校、中学校、高校、自宅のそれぞれで、飼育・栽培の経験がある動植物を選択肢の中から選ぶ（複数回答可）。

○動物5種、植物3種を鉛筆で描く。

その際、できるだけ本物らしく描くように指示をする（30分間）。イラストについては、昨年と同様に判定基準を設けて、2名で正誤の判定を行う。

〔判定基準〕

イラストが、指示された動植物に見えることを前提に、以下の条件が全て絵の中に含まれている場合のみ正答とする。

ウサギ・・・	4本足、ひげ、口の形
ウコッケイ・・・	2本足、とさか、くちばし
ザリガニ・・・	はさみ、はさみ以外の足、頭部と胴尾部
チョウ・・・	羽4枚、胴体部分
アリ・・・	頭、腹、尻、足6本
イナホ・・・	米粒状の実、実の付き方
サツマイモ・・・	形、でこぼこした感じ
チューリップ・・・	花びらの形

3. 期間

平成19年6月

4. 調査対象

目白大学人間学部子ども学科1年生 139名（男子17名、女子122名）

Ⅲ. アンケートの結果と考察

1. 飼育体験について

表1は、学生の飼育経験についてのアンケート結果を表にしたものである。合計は述べ人数で示しており、合計の人数が少ない順に上から並んでいる。これによると、自宅以外での飼育経験の頻度が高いのは、体が比較的小さい動物であることがわかる。なかでも金魚やめだかは、アレルギーの心配もなく、比較的世話が簡単であることから、小学校までの期間に飼われることが多いようである。だがそれ以上にウサギの飼育が最も多くなっている。（金魚99、ウサギ115）金魚などは、飼育が簡単であっても直接触れることはできない。ウサギについては、直接触れたり、抱っこしたりと、スキンシップができるところに人気があるのではないだろうか。小学校学習指導要領にも、動物の飼育・観察の内容が含まれているので、教育的観点からも選ばれるのであろう。

一方自宅での飼育経験を見ると、金魚が圧倒的に多い。ウサギはかなり少なく、触れ合うための動物としては、犬やねこ、ハムスターがそれに代わっているようである。自宅での飼育動物については、時代の流行も影響しているようで、学生たちが小学生の頃には、ハムスターの飼育に人気が集まっていたことも関係があると思う。

ただ、中学校以降は急激に学校での飼育動物は減っている。中学校の学習指導要領には、「身近な植物の観察・実験」「身近な動物の観察・実験」といった言葉が何度か出てくるのだ

が、実際に飼育や栽培を行っての授業をすることは少ないようである。これは授業内容が、飼育そのものを目的とはしておらず、理論を深めるための内容になっているためであろう。つまり、家庭で動物を飼育していなければ、中学校以降は動物に接する機会が急激に減少するということである。

表1. 飼育経験（人）

	幼・保	小学校	中学校	高校	自宅	合計
山羊	2	1	0	0	1	4
クジャク	8	5	0	0	0	13
あひる	7	8	2	0	0	17
モルモット	9	8	0	0	0	17
ねこ	3	2	3	2	15	25
かえる	4	11	2	1	11	29
犬	5	6	3	6	35	55
小鳥	20	23	1	0	12	56
亀	11	29	4	1	24	69
ザリガニ	16	39	1	0	27	83
ハムスター	8	30	5	2	39	84
鶏類	23	62	1	0	5	91
虫	21	38	3	0	34	96
めだか	11	49	13	3	29	105
ウサギ	42	71	1	1	11	126
金魚	24	57	12	6	71	170
その他	5	8	5	2	13	33

男女差については、男子学生の人数が女子学生に対してかなり少ないため、正確な比較はできないので、参考程度に述べることにする。図1、図2に示すとおり、男女差が見られたのは、ザリガニとにわとり類の飼育経験についてである。ザリガニについては、自宅での飼育経験で男子の割合がかなり高くなっている。親の養育態度や子ども自身の興味の違いが原因ではないだろうか考える。にわとり類の飼育については、幼稚園・保育所、小学校で女子の飼育経験の割合が高くなっている。この原因ははっきりとはしないが、小学校などは飼育委員が動物の世話をする場合が多く、飼育委員になる児童に女子が多いということなのかもしれない。

図1 ザリガニ飼育経験男女比較

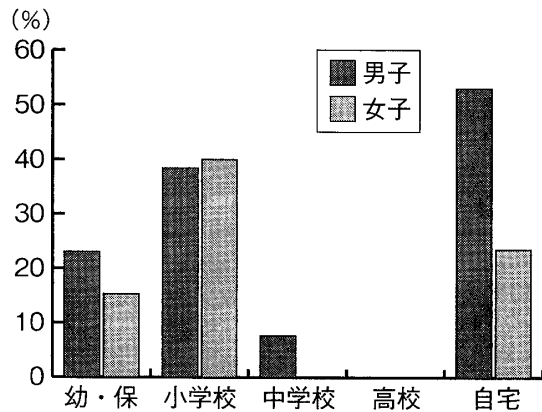
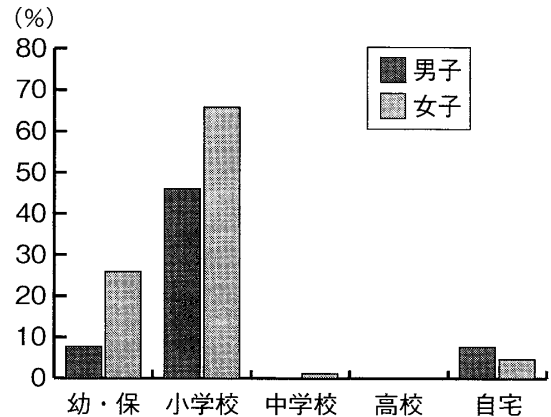


図2 にわとり飼育体験男女比較



2. 栽培体験について

図3はこれまでの栽培体験である。これもまた小学校までの体験が圧倒的に多い。特に小学校では教材として栽培を行うので、この時期の経験が非常に多い。図4にある栽培経験が上位の野菜、特にミニトマト・ヘチマなどは小学校の教材として使われており、アンケートからも小学校での栽培体験ありとの回答が非常に多かった。

栽培体験の傾向としては、幼稚園・保育所、および学校での体験が中心となっている場合が多く、自宅での栽培経験はそれほど多くはない。ただし、家庭菜園などをやっているのでは、と想像できる回答が少数あり、そういった回答の中に栽培経験が下位の様々な野菜が含まれていた。

今回のアンケートの選択肢に挙げた野菜は、ほとんどが子ども学科で栽培をしたことのある種類である。出来栄の良し悪しはあるが、栽培自体はそれほど難しいものではない。特に、葉物についてはプランターでも十分に栽培できるので、庭がなくても栽培は可能である。にもかかわらず自宅での栽培経験がかなり乏しいのは、親の側に栽培が難しいという先入観があるか、あまり興味がないかのいずれかであろう。

図3 栽培経験

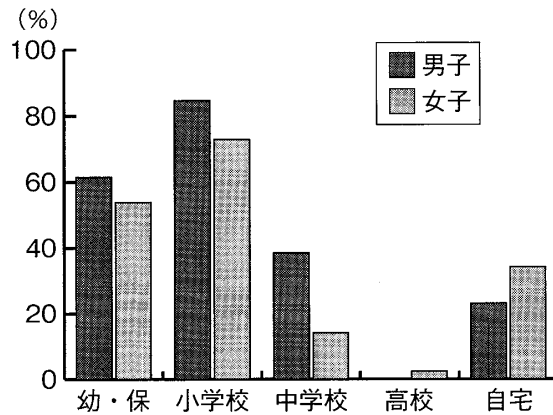
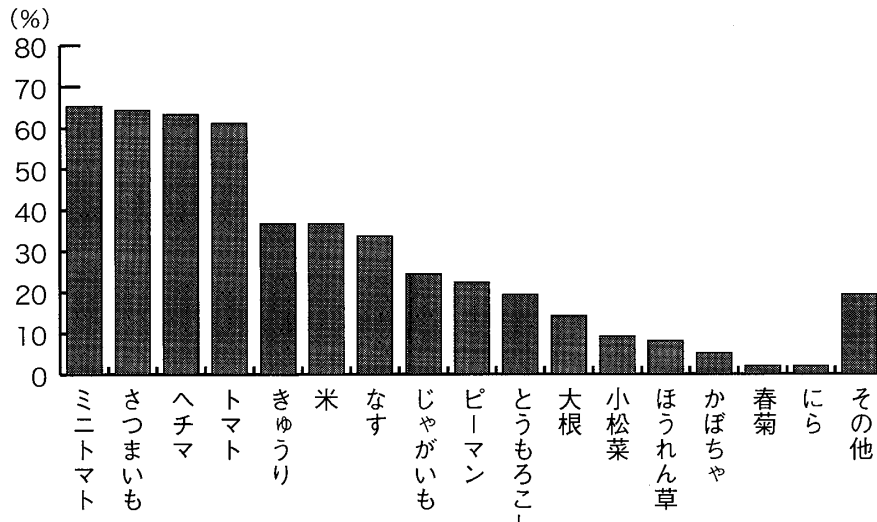


図4 栽培経験のある野菜



3. 子どもの頃の遊び体験について

今回のアンケートでは、子どもの頃の体験について、動物に関連するものと植物に関連するものに分けて質問をしている。図5は動物に関連するもの、図6は植物に関連するもののアンケート結果である。「赤ちゃんを抱く」「おむつ換え」については、保育学生ということを踏まえてアンケートの項目に入れた。

結果を見ると、他学科の学生と比較していないのでこの結果が保育学生の特徴であるかどうかははっきりしないが、予想していたより多くの体験を多くの学生がしていることがわかる。しかし、2の項で触れたように、動物に関連する体験より、植物に関連する体験の方が全体的に数値が低いことが図5・6から見て取れると思う。また、男女差も見られ、動物に関連するものは男子が多く、植物に関連するものは女子の方が多い。以下、少し細かく検証してみる。

図5 子どもの頃の体験①

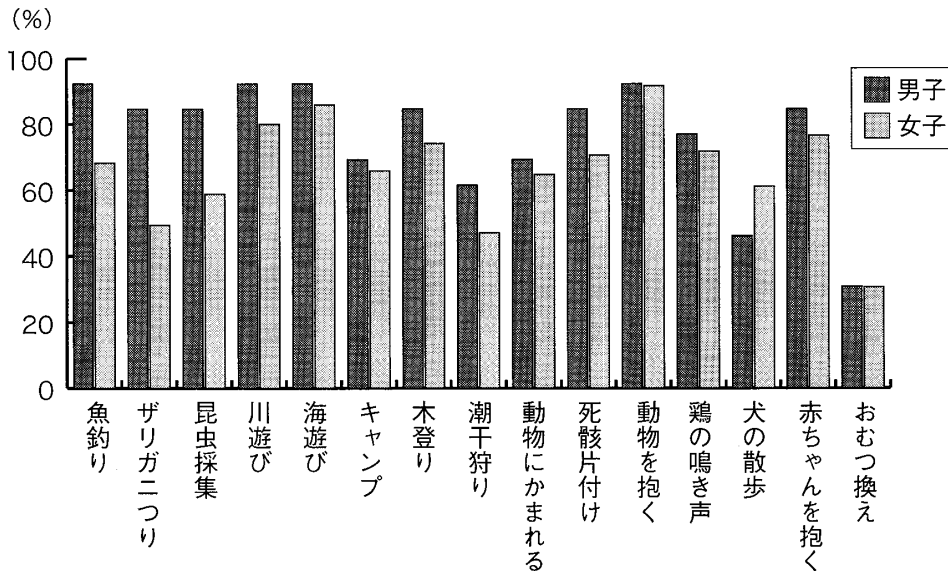
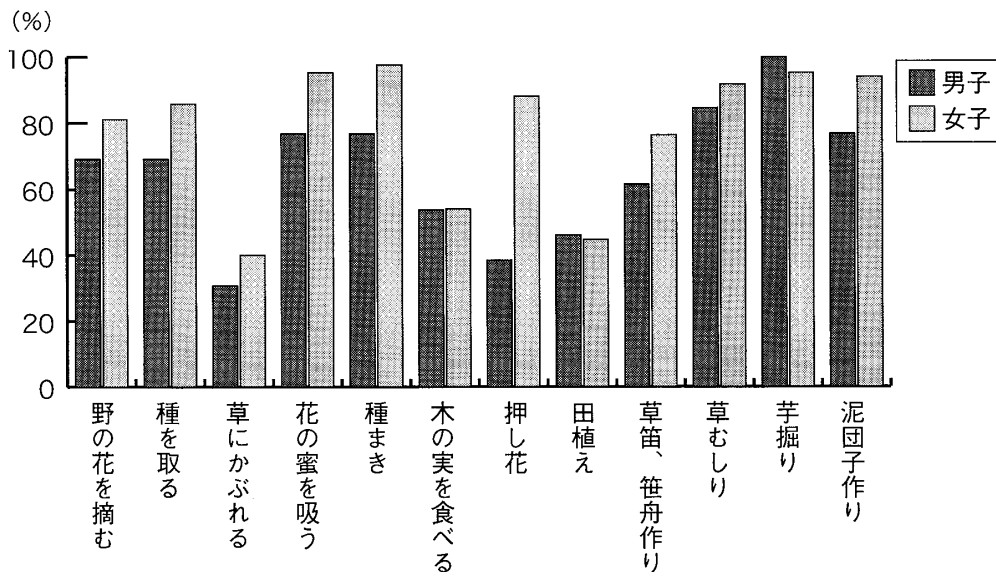


図6 子どもの頃の体験②



①動物に関連する体験

男女ともに体験の多い項目は、「動物を抱く」「海遊び」「川遊び」で、80%を超える学生が体験をしていた。また、「赤ちゃんを抱く」「木登り」「鶏の鳴き声を聞く」についても男女ともに70%を越えているので、多くの学生が体験していると考えて良いであろう。

男女差がはっきりと見られる項目は、「魚釣り」「ザリガニつり」「昆虫採集」であった。この3項目については20%以上の差が見られる。これらはほとんどが自宅での体験であると考えられるので、親の養育態度や子どもの遊びにおける性差が大きく影響していると思われる。

この中でもっとも体験の少なかった項目が「おむつ換え」であった。「赤ちゃんを抱く」については男女とも70%を超えているのだが、「おむつ換え」については男女とも30%ほどである。きょうだいの人数が少ないことが影響していることは明白である。ちなみに「犬の散歩」も比較的数値が低いのであるが、自宅での飼育体験者が35名であるので、この数値は当然であろう。

②植物に関連する体験

男女ともに体験が非常に多いのが「芋掘り」であった。ほぼ全員が体験をしている。ただ、図4の栽培経験ではさつまいもの栽培経験は60%を超える程度なので、必ずしも自分で育てた芋を掘ったわけではなく、農園などで芋掘りのみを体験したという場合も相当数いると考えられる。最近では幼稚園・保育所の行事に芋掘りが入っていることが多いので、そこでの経験も回答に反映しているのであろう。

このほかに、男女ともに体験が70%を越えた項目は、「花の蜜を吸う」「種まき」「草むしり」「泥団子作り」であった。ただし、「花の蜜を吸う」「種まき」には20%程度の男女差があり、女子の体験が多くなっている。

男女差が非常に大きく出たのは「押し花」で、約50%もの差があり、女子の経験が圧倒的に多い。これは、女子特有の遊びとも考えられるので、このような結果になったのもうなずける。

男女ともに体験が少なかったのは、「草にかぶれる」「木の実を食べる」「田植え」であった。「田植え」については、簡単に体験できるものではないのでいたしかたないであろう。しかし他の2項目については、子ども時代の遊びの範囲がやや狭かったような印象を受けるのである。雑草が生え、食べられる木の実が自生しているような自然が、子どもの生活環境から減少している現状もある。また、親がそのような遊びを嫌っている状況もあるのかもしれない。

IV. イラストについての結果と考察

1. 各イラストの正答率

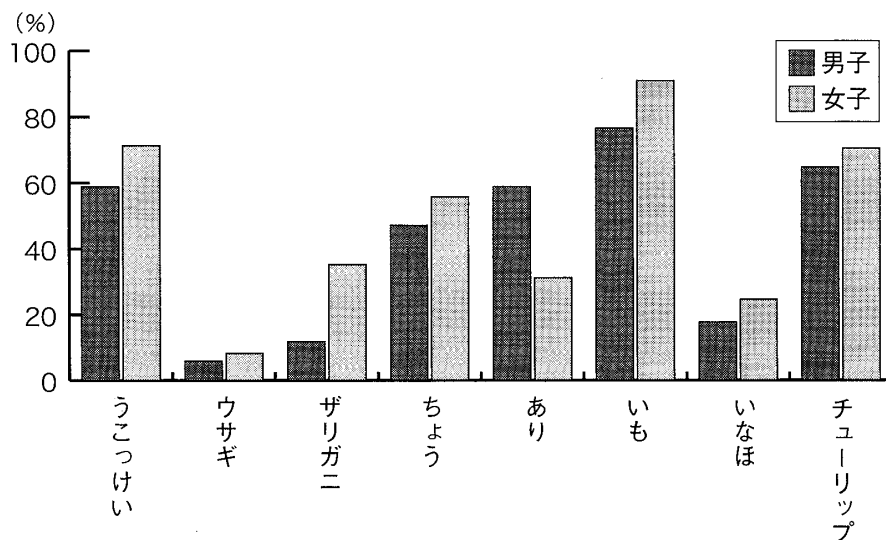
8種の動植物についてイラストを描かせ、前述の基準で判定した結果を図7に示した。男女別に正答率であらわしている。その結果、サツマイモは男女ともに70%を超える正答率を示した。昨年調査結果では、専攻科学生のサツマイモ正答率が84.62%だったので、調査対象学生はまだこの時期芋掘りを体験していないにも関わらず高い正答率であったといえる。ただ

し、昨年の専攻科学生のイラストには、サツマイモの蔓までがリアルに描かれているものが数多く見られたのに比べ、今回の1年生はサツマイモそのもののイラストばかりであったので、正誤率には示されない内容の差は見られた。

その他70%を超えたのは、女子のウコッケイと女子のチューリップであった。この2種類については男子も60%前後の数値には至っている。飼育当番の際、ウコッケイの飼育は人気がなく学生が嫌がることも多い。しかしイラストに描くと案外その特徴を捉えている場合が多いことは意外でもある。

男女差が見られるのは、アリとザリガニであった。ザリガニでは女子の数値が20%ほど高く、アリでは男子の数値が30%ほど高い。前述の通り、これまでの飼育経験や遊びの体験から予想すると、この2種類については男子の数値が高くなるはずであるが、結果はそうはならなかった。これは、これまでの経験がイラストを描く際には何の影響も与えていないということを示している。これと同様のことが、ウサギの正答率からも伺える。ウサギの正答率は、8種類のうち最も低く、男女とも10%にも満たない。イラストを見ると、ほとんどの学生がウサギの口を描いていなかったり、ただの一本線で描いていたりするのである。前述の通り、ウサギの飼育は小学校までの間にかなり多くの学生が体験している。しかしその体験は正しい観察や表現には結びついていないのである。昨年と同様に、漫画的なウサギも数多く見受けられた。ウサギに関しては、アニメーションなどの影響がかなり大きいことが良くわかるのである。ウサギの次に正答率の低いのがイナホである。これは、イナホという言葉すら知らないと思われるイラストも多数あったことから、経験不足がそのまま結果となっていると考えられる。

図7 イラスト正答男女比較



2. 今回調査で見られた特異なイラスト

今回調査の段階では、学部1年生は子ども学科での飼育・栽培の経験はそれほどしていない。そのため、学生の描いたイラストは、これまでの経験を通して抱いているイメージである。今回調査の中で、特徴的な誤答例または、特異なイラストを紹介する。ただし、これらのイラストを描いた学生は、決して学業や美術の成績が悪いわけではない。

イラスト1、2はチョウの絵である。チョウの羽は4枚が正解であるが、イラスト1は胴と羽根が一体化して怪獣映画にでも出てきそうな絵になっている。イラスト2は羽根が2枚になっている。不正解となった学生のほとんどが2枚の羽根を描いていた。

イラスト3、4はイナホの絵である。イラスト3はくじゃくの羽根にも見える。イラスト4はいもむしに毛が生えているようにも見える。

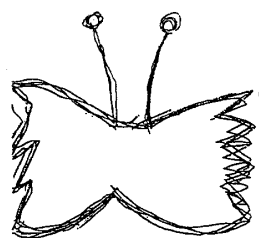


イラスト1



イラスト2



イラスト3



イラスト4



イラスト5

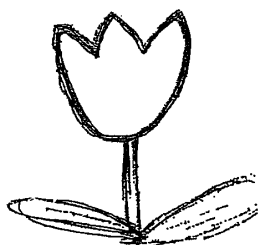


イラスト6

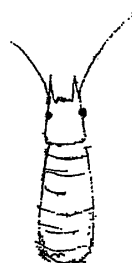


イラスト7

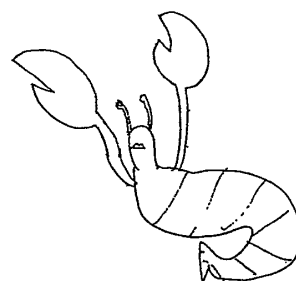


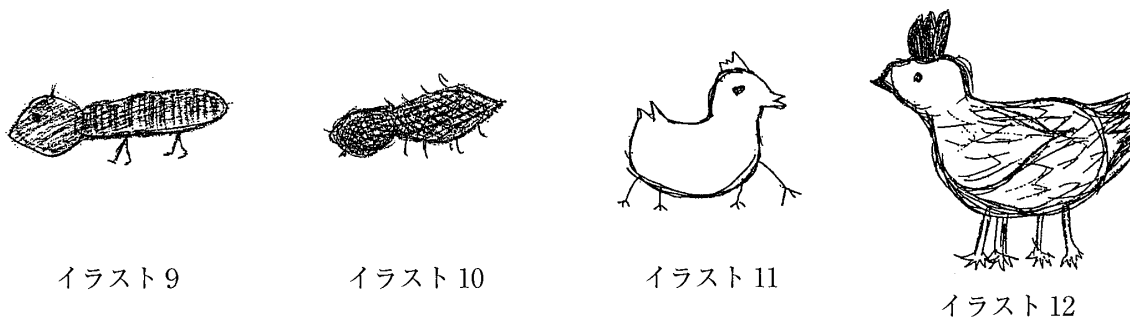
イラスト8

イラスト5はサツマイモの絵である。形はどの学生も理解してはいるが、不正解の学生の絵は、どのような姿でサツマイモを表現して良いのか分からずに、イメージの抽象画になってしまっている。イラスト6はチューリップの絵である。花びらがわかれていない。

イラスト7、8はザリガニの絵である。イラスト7は手足がなく、ヒゲが描かれているが、何かの幼虫のようである。

イラスト9、10は、アリの絵である。両方とも足の数が不明である。

イラスト11、12はウコッケイの絵である。今回も昨年同様に「4本足のにわとり」を描いた学生が数人いた。



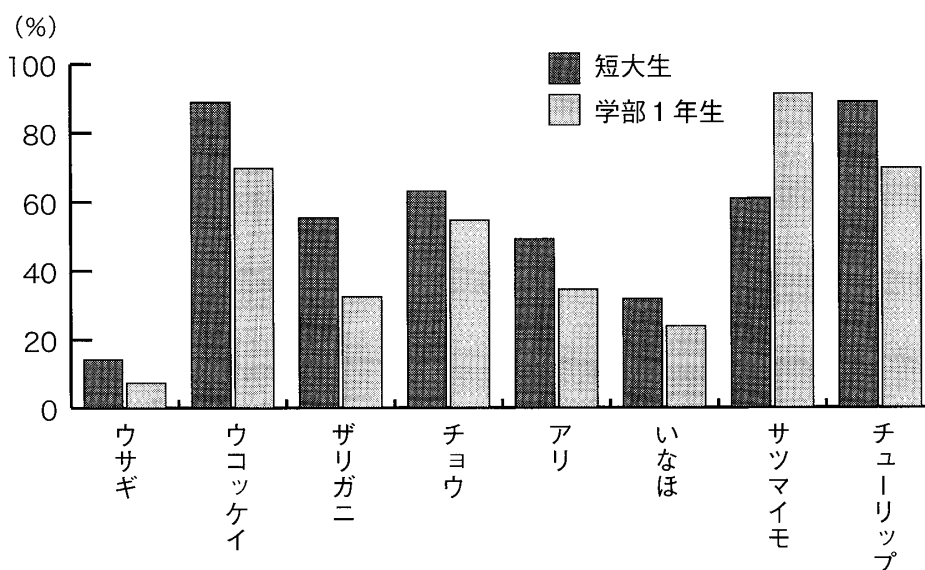
このような学生のイラストを見ると、これまでの飼育や栽培の体験に興味・関心を持ってしていたとは到底思えないのである。

3. 子ども学科短大生との比較

昨年の子ども学科短期大学部で今回と同様の調査を行い、その結果を報告した。(注1)その時の調査結果のうち、飼育・栽培実習の経験が少ない1年生のデータを除き、1年半以上飼育・栽培実習を経験している2年生および専攻科生のデータの平均値と、今回の学部1年生の数値を比較してみた。これにより、子ども学科での飼育・栽培実習の経験の違いによる差があるかどうか検討してみることにする。

図8は昨年調査の正答率と今回調査の正答率を比較したものである。これを見ると、サツマイモ以外は短大生の成績が良くなっている。とはいっても、最も差があるザリガニでも20%程度である。成績の悪いウサギやイナホについては、両者の成績が悪いので、経験の差が出ているとは言い難い。また、サツマイモについては、今回の調査結果の方がかなり成績が良い。この1年生の正答率の高さは子ども学科入学前の体験が影響しているであろう。

図8 イラスト正答率比較 (短大生と1年生)



この結果を見ると、飼育・栽培の経験が多少は影響しているようにも感じるが、はっきりとした結果とはなっていないようである。現在の実習方法では、学生の興味・関心を掻き立てたり、しっかりとした観察をしたりするまでには至っていないということであろう。

V. 学生の表現技術について

前章まで、学生のイラストについてその体験から述べてきたが、ここでは学生の表現技術に目を向けてみる。

1. 図式期の重要性

図式期とは見て描くのではなく、覚えていることや、知っているものを絵型で描く時期のことをいう。

(名前)	(年齢)	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12
・ケルシュタイナー							錯画期						図式期
・トムリンソン							幼児画						図式期
・関衛							錯画期						概念描画
・ローエンフェルド							なぐり画期						図式
・リード							象徴主義						叙述的写実主義
・マックフェ							なぐり描き						図式的表現
・小学校学習指導要領解説							なぐり描き						図式の段階

上記の表での名称は研究者によって異なっている。ドイツのケルシュタイナーは2歳後期から5歳までを錯画期といい、5歳から7歳後期までを図式期といている。日本の小学校学習指導要領解説によると、1歳から3歳までをなぐり描きといい、4歳から9歳までを図式段階と解説している。

学生の発達段階にはさまざまな教育環境や家庭環境がある。それらの環境の中で図式期だけは、自らが表現したいまま表現できる時期でもある。図式期後期後、概念画がおおくなっていくのである。この概念画とは抽象的なもの、本質的なもの、または現象をつくらぬ法則的なものなどを反映したような概念的表現という意味で、厳密な表現はされておらず、いわゆる型にはまった絵のことであり、類型的なもの、ぬり絵、さし絵的表現、大人びた絵などによく言われる。空は青、木は緑、土は茶色と初めから決めて描くのは、実際の風景に向かった感動から生まれた色彩ではなく、そう描くものだという型通りのものである。「のびのびとした絵」「おもしろい絵」などは評価されない絵の総称をいう。

特異なイラストを描いている学生に共通しているのは、表現が抽象的であり、漫画的な表現になっていることである。表現方法が図式期から先に全く変化していない。これは、幼稚園段階から小学校高学年に及ぶ図式期における美術教育のあり方に問題があるのではないだろうか。学生の描く絵には、美術の楽しさや豊かさが感じられないのである。

2. 学生の70%は絵がきれい

磯部錦司(2006)(注2)は2003年に18歳~25歳までの男女335名を対象にアンケートを試みたところ「絵を描くことが好きか」の質問に、「嫌い」と「今は好きだけど昔はきれいになったことがある」と答えを合せると47%という結果になった、と報告している。また、他の調査では70%以上が「嫌いである」という結果もある。将来保育者や教員となる養成大学の学生を対象にした調査においても同様の数字が出ている。磯部によれば、どの時期に嫌いになったかを調べてみると「嫌い」と「嫌いになったことがある」の両方とも小学校までの時期に60%以上が嫌いになっている。小学校中学年から中学校にかけての時期が一番多く、幼児期にも一割弱の幼児がいるのである。その理由は、子ども自体に要因があるのではなく、大人の言動や大人の絵に対する見方や考え方に問題があると述べている。また、「絵を描くこと」と「絵を見ること」を比較した場合は絵を描くことが嫌いな人でも87%の人が「見ることは好き」と回答している。描くことが好きな人では90%近くが「両方好き」と回答している。

私自身は5年間子ども学科で教壇に立っている。初回の授業で必ず学生に「絵は好きか」と尋ねる。やはり毎年半数以上の学生が「絵は嫌い」「苦手である」と答える。絵が嫌いな理由に必ず「うまくない」「うまい人に勝てないから」「センスがないから」等と半ばあきらめに近い回答が出てくる。「どのように描いていいのかわからない」「描き方がわからない」等の困惑の回答も出てくる。これらは美術の授業を受講する以前の回答であり、1年間の授業の受講後は「絵が好き」という回答が増えてきている。

学生が絵を嫌いな原因をまとめると以下のようになる。

- 1) 比較されて、優劣をつけられる。
- 2) 強制的に描かされている。
- 3) 自分の絵が劣っていることが、自分自身までもが否定されているように感じられる。
- 4) センスがない。
- 5) 思い描いた絵と実際に描いた絵のギャップが大きかった。
- 6) 楽しんで描くのではなく、技術的な面を要求されるから。
- 7) 成績が悪かったから。

磯野錦司(2006)より

以上のことからわかることは、全て第三者からの言動や指導方法に問題がある、という点である。うまく描けないことや技術的なことは、実は「比較」や「評価」といった他人の価値観との関わりが大きな影響を与えているのである。

岡田忠之(1981)(注3)は「絵が嫌い」な学生というより学生のほとんどは、表現能力の面からみると、小学校学習指導要領にいう「写実れい明段階(9~11歳)」、つまり小学校の中、高学年の段階で停滞してしまっているように見うけられる、と述べている。学習指導要領の解説にいう「人物画においても硬さは残っているが衣服の強調がみられ(略)、空間的表現

についても、重なりが描けるようになり（略）」といった段階のことであり次の段階まで進んではない。「外見的写実段階（11～13歳）」の「学習の実際から見られる、具体的ないくつかの事例をあげてみると、観察力が増して、物を客観的に見る傾向が強くなる。大小、形の違い、明暗、陰影、精密描写、分析して描くなど、知的判断や因果関係のすじ道を合理的に考え全体から部分の観察もできるようになる。その反面、素材さ、純真さが失われてくる」という、小学校高学年から中学校の段階とされている外見的写実の段階を、ほとんどの学生が十分に習得されていないと述べているのである。

つまり概念画は幼稚園段階から小学校高学年に及ぶ図式期における教育のあり方がとても重要なのである。図式期に描く時に子どもは対象物を真剣に観察する。なんの概念も持たずに、ただ対象物が好きだということだけで観察するのである。

学生は、好きなように自由に描く図式期を十分に体験しないままに、学校での技術的な教育を受け、コンプレックスを抱えて描くことが嫌いになってしまうのであろう。そしてそのことにより、対象物を十分に観察する意味や面白さを体験することができないため、さらに描くことに対して苦手意識を強めていき、技術面での成長も止まってしまうのではないだろうか。

3. ある小学生の絵

では、図式期の小学生はどのように絵を描くのであろうか。イラスト13・14は小学校低学年児童に今回の調査と同じ条件で8種類のイラストを描かせたものである。児童は日頃からザリガニを飼育しており、観察しては絵を描き、また観察しては直接手の平に乗せて遊ばせている。さらに、昆虫採集をしてありとあらゆる虫を飼育し、観察しては絵を描き続けるという習慣がある。サツマイモやイナホに関しては、幼児期から子ども学科の学外実習に参加をして学生と同様の経験をしている。条件的には学生とほとんど変わらない体験があるといえる。イラストを見ると、ザリガニの後ろ足はしっかりと小さなはさみが表現されている。チョウの羽は、絵では3枚しか描かれていないが、4枚存在していることが明確である。実にバランスが良い。アリは、児童が直接観察しながら描いたのではないかと思う程、リアルな表現である。どうしてこのような絵が描けるのであろうか。大学生の様子と比べると、児童は興味と好奇心で対象物を繰り返し観察し、納得ができるまでスケッチをする、ということに大きな違いがある。つまり、「絵がすき」ではなく対象物が好きということが第一にある。それに対して、チューリップ、イナホ、サツマイモ、ウコッケイ、そしてウサギに関しては、学生の描いた絵と差がない。

ザリガニ、チョウ、アリについて、児童が描いた絵と学生が描いた絵に明らかに違いが見えた理由は、対象物に対する興味と思いかた、そして対象物への好奇心である。さらに、絵を描くことに対する苦手意識がまったくないことで、児童は絵による表現を楽しんでいる様子うかがい知ることができるのである。

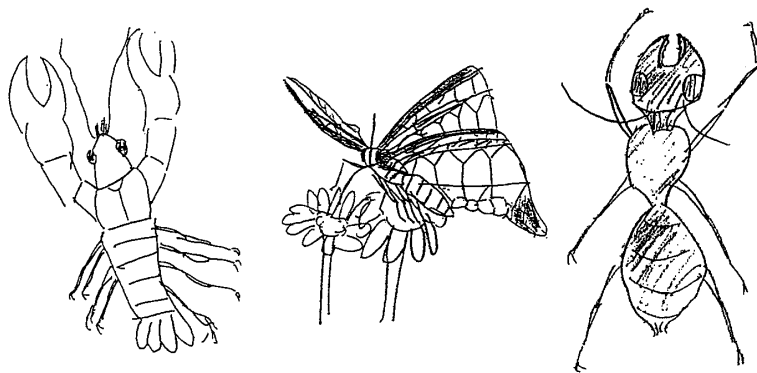


イラスト 13



イラスト 14

VI. まとめ

昨年、今年と2年間の調査を通して、学生のイラストには幼児期から今までの飼育・栽培の体験がそれほど影響を与えていないように感じられる。今回の調査結果から、体験が生きてこない原因として考えられるのは、①生活に密着していない、または自分が中心となって世話をしていない、②観察するための興味・関心が薄い、③イラストに描くための技術が未熟である、の3点ではないかと推測することができる。学生のイラストが、きちんと動植物の特徴を捉えることができるようになるということは、飼育・栽培の活動が学生により密着し、学生の興味や関心を喚起していることを表す。さらにそれは、学生が動植物を十分に観察し、表現する技術を身につけたということにもなる。このことは、学生の保育力の育成に大きな影響を与えると考えることができるだろう。

現在行われている飼育・栽培実習の意味は、学生たちにはまだ十分理解されていない。命の大切さを知ることはもちろん、保育に大切な子どもに対する観察力が本来養われるはずの実習である。保育者を目指す子ども学科の学生は、子どもに対する関心が一番でなくてはならない。そして、正しい観察をもとに、子どもたちにより良い保育を提供していかななくてはならない。保育学生の教育に携わる者として、学生の正しいところと正しい知識と正しい観察力を育てるためのより良い教育環境を提供する努力をしていかなければならないだろう。

【引用文献】

- 注1 高橋弥生、おかもとみわこ「保育者をめざす学生のもつ動植物に対するイメージに関する研究」
目白大学短期大学部研究紀要第43号 195～208頁
- 注2 磯辺錦司「子どもが絵を描くとき」一藝社 90頁～91頁
- 注3 岡田忠之「お絵かき大すき」風媒社 16頁～17頁

【参考文献】

ハーバード・リード「芸術による教育」フィルムアート社
小学校学習指導要領
中学校学習指導要領